Asoko kara ano yo

あそこからあの世

プロローグ　女体盛り

「ほら、これが日本人の偉大な発明である、女体盛りってやつだよ、すばらしいだろ」

と、細い金縁の眼鏡をかけて鼻が大きい黄（こう）が、俺の耳元で囁くように言った。奴は我が市の不動産部門を牛耳っている役人で共産党幹部だった父の元部下の一人だ。この男には、視察にいった公立の女子大で孫と同じ年齢の女子大生を気に入って、愛人にしているという目出度い噂がある。

「は、はあ」と俺はテーブルで全裸の状態で数人の男たちに**視姦**されている少女の顔を、ぼんやりと眺めながら言った。肩までかかった漆黒の髪に意思の強そうな瞳と少しだけ小さ目の鼻。なかなか俺にとっては好みのタイプではあるが、なんにせよ尋常の過去を背負って生きてきた娘ではないことは確かだ。

少女の身長は百五十センチをわずかに超える程度で、どちらかというと小柄な部類に入るだろう。乳房だけ

は誇らしげに**隆起**しているが、身長のわりに長いその腕や足の脂肪は薄くほっそりとしていた。その表面積の小さな少女の肉体に、所狭しと新鮮なマグロ、サーモン、ヒラメ、そのほか俺の良く知らない白身の刺身が、上は**鎖骨**から下は**バギナ**の辺りまでぎっしりと敷き詰められているのだ。白熱灯の光を受けてキラキラと光りながら。

その光景を眺めていると、エロティシズムよりは馬鹿馬鹿しさのほうを強く感じるのは俺だけだろうか。しかし自分よりも年齢も地位も高い周りの男たちは遠慮もなく熱っぽい視線を少女の白い柔肌（やわはだ）に無遠慮に浴びせていた。恐らく**刺身**は彼女の健康を配慮して処理されているハズも無いだろうから、相当冷たいはずだ。俺はむしろ少女のお腹が、冷たい魚肉で冷やされて下痢にでもならないかと意味もない心配をしてしまう。しかし、彼女の整ってはいるが感情の乏しい白々とした表情からは、如何なる苦痛の色も読み取れなかったので、俺は意味もなく安堵のため息をついた。

いったいどういう経緯で、この娘はこのような如何わしい場所に連れてこられて、人間の**尊厳を剥奪**された形で晒し者にされているのだろうか。しかし、この国で

は一度裏通りに入れば、どんな禍々しいことが行われてもいても不思議ではない。共産国家と名乗りながら、世界のどの資本主義国家よりも**貧富の差**が大きく、しかも**貧者の尊厳**が徹底的に踏みにじられる国。それがわが国ではないか。

「ガキにしては、かなり発育がいいな」

と俺の左隣に立つ眼鏡をかけた中年の髪の薄い男が、小皿からピータン豆腐を銀のフォークでつまみながら言った。奴の細い目が少女の隆起した大きな**白桃**のような**乳房**を、執拗に睨んでいる。彼は孫（そん）といって俺の勤める設計事務所の社長であり、いわば俺の大ボスだ。

「確かに立派なおっぱいしているな、このシャオジエ（お姉ちゃん）は。刺身の相手だけさせるのは相当に惜しいな」

と黄（こう）が感心したように言った。

「なんだったら、あんたの愛用しているホテルの部屋に届けてやってもいいんだぜ」と黄（こう）にそう後ろから呼びかけた、いかつい顔をした髭面の中年男は、郭（か

く）といって地元の警察の幹部の一人だ。裏社会にも相当顔が利くという噂で、この悪趣味な地下レストランも郭の手下が経営しているということだ。

「いやいや、そういうのは若いもんに譲らんとな」と黄（こう）が俺の肩を馴れ馴れしく、右手で揉みながら俺に言ってくる。

「はあ」と俺は不機嫌な表情にならないよう気をつけながらも気のない返事を黄（こう）に返して、グラスの赤ワインを啜る。まるで貧民から搾りとった**血液**の色みたいだなと、俺はそのボルドーワインを見ながらぼんやりと思った。

「このシャオジエはなあ、面白いんだぜ」と郭（かく）が汗で、テカった鼻をボリボリと掻きながら一堂に言った。

「最初に抱かれた爺さんを天国に送ったんだとさ」

「ほお、それは相当の**名器**なんだなあ、どれどれ」と俺の上司である孫（そん）が、少女の股間に乗せられているピンク色のサーモンを箸でとりわけて彼女のアソコを露出させる。年齢のわりに（？）無毛のつるつるの綺麗な**バギナ**が、男たちの目の前に淫靡に浮かび上がる。バギナが刺身と同じようにテーブルに並べられていると、まるで食べ物の一部のように見えてくるから不思議だが、正直言って確かに艶かしい。

「どれどれ、男を天国に送ったアソコは刺身よりも新鮮かな」と黄（こう）が顔をテーブルに近づけて、嘗めるように彼女の股間を見つめている。誰もその場にいなければ、躊躇なく嘗めていたかもしれない。いや、もう少し酔えば、誰がいようともお構いなしに処女の割れ目に舌を這わせているはずだ。奴の荒い鼻息が彼女の股間の陰毛を、少し揺らしているように見えるのは、目の錯覚だろうか……。男たちが下品な笑みを浮かべながら少女の股間を品評している間、彼女は無表情で天井を見上げていた。

（寧の世界壱）

私が住むこの施設は上海から広州に向かう幹線道路を車で南に一時間行き、そこから西に更に田舎道を一時間行った場所にある。まるで西洋の田舎の旅館のようなこの建物の側には、綺麗な湖があり、美しい自然が残っている。私はその周りを一人でたまに散歩をする。湖の水はとても澄んでいてそこから採れる魚は私の大好物だ。

私は自分でも半信半疑である特殊能力のおかげで、普通の中国の風俗嬢が二度死んで、生まれ変わっても経験できないような恵まれた生活をおくっている。

最初、私はただの雲南から売られてきた何も知らない性奴隷だった。もちろん処女だった私は、ある心臓が弱っている金持ちの老人に、ここと比べものにならないみすぼらしい蘇州の置屋で気に入られ、彼が宿泊しているホテルにデリバリーされて抱かれた。故郷にいた時は年寄りには性欲があるなどとは、思いもしなかった。ましてや私のようなガキに、性的な興奮を覚える年寄りがいるなどとは、想像すらしなかった。しかし、その老人はシワだらけの喉仏を震わせながら、私の未成熟な乳房を執拗になめ回し、老人とは思えない若々しい動きで、私の身体を飴細工のように捏ねくりまわした。多分何か、バイアグラのような精力剤を服用していたのだろうか。男は最初に私に激しい痛みを与えて、私のなかに入ってからは飽きることなく何度も私を貫き続けた。信じられないことに、彼は一回射精した後も一瞬も休まずに、私の身体にのしかかってきた。ところが二回目の射精を果たすと、彼は私の身体に全体重を預けて、ぴくりとも動かなくなってしまった。

“死をもたらすシャオジエ”として、その日以来私には誰もお客がつかなくなってしまった。私は欠陥商品となってしまい置屋の主人は、私を安値で厄介払いすることばかり考えていた。そして私はまた違法な取引で別

の業者に買われて、男に抱かれるかわりに**奇妙な見世物**の**道具**にされた。私は肌の美しさを買われて器の代わりに、全裸で食べ物を**盛り付けられて**テーブルに置かれて展示されるようになったのだ。しかし、その仕事も長続きはしなかった。ある日全身に刺身という日本の生魚を体にのせられた状態で（それまではケーキが多かったが）放置された私は、下腹部が冷えてしまって我慢できずに客たちの前で**放尿**してしまったのだ。その時にたまたま居合わせていた若い男が私を気に入り、私はしばらく男の家に住まわされた。彼はその間私の身体に一切触れることはなく、忙しそうに何かの準備に追われていた。そして半年後に私は男が所有するこの湖畔の施設に連れて来られる（その男は大金持ちで自ら、その施設を購入したということだった）。

彼はそこで私に法外な値段を付けて、私に死ぬ間際の老人か病人だけの相手をさせた。その施設は一見瀟洒な洋風のホテルに見えたが実態は“死の臭い”で満ちていた。私の“**死に神**”としての日々が始まった。

オーナーである若い男は月に一度施設の視察にやってきた。彼は老人や若い病人が、快楽の果てに死んだ話を熱心に私から聞いて過ごした。彼は人間がこの世から減り、二酸化炭素の排出が少しでも減ることは、素

晴らしい事だと私の仕事が終わるたびに私を褒めてくれた。

「姫にはみんなが感謝していると思うよ」

彼は私のことを常に姫と呼んだ。

「みんなって誰ですか」

「君に抱かれて逝った人達だよ」

「そうですか」私は半信半疑で言った。

「君に出会えなければみんな病院で薬漬けになって、医療器具に囲まれて死んでいくはずだった。しかし姫のおかげで最高の快楽といっしょに逝けたんだ。最高の思い出に包まれて」

私はそれを半信半疑で聞いていた。でもやっぱり嬉しかった。私はオーナーの期待を裏切るようなことだけはしたくなかった。両親に売られて故郷の雲南を離れてから、私の心は糸の切れた凧のように、漂っているだけだった。そこで彼と出会って、彼に姫と呼ばれ、私は彼の期待に応えることだけが生き甲斐になってしまった。

それは私がこの湖畔の施設に住み始めてから、二年の月日が経った晩秋のことだった。やって来た客の男はまだ若いが、きつい心臓の病を抱えていた。親はとても裕福らしく、法外な報酬がオーナーにもたらされた。専属の看護婦がいて、私は彼女といっしょに協力して彼の

世話をした。彼が過ごしていたのは、湖がよくみえる二階の部屋だった。調子がいいと彼は外を散歩して、田舎の美味しい空気を楽しんでいた。湖の側には雑木林がありそこで彼は風景画を描いたりして過ごしていた。

彼のような若い裕福な家の患者をみていると、神様はある意味で公平なのかと考えてしまう。確かに彼は私が得ることが出来なかった普遍的な幸福の種（裕福な家庭、最初から約束された社会的地位、愛情溢れる家族、優秀な頭脳）を持って生まれたが、それは全て無意味なものになりつつあるのだから。

私は病人の簡単な介護のやりかたを身につけている。オーナーが以前プロの看護師をこの施設に招いて、私に教育させたためだ。私は彼の身体を清潔なタオルで拭いたり、体温や脈拍をはかったり食事の世話をしたりと全く本業とは関係のない業務をこなしていた。身につけている服も清潔な看護服を着ていた。これはオーナーの指示で、いくら患者がもっとセクシーな服を希望しても変わることはなかった。だが客が求めれば素早く私は服を脱ぎすて、客のさまざまな要望に応えることになっていた。

しかし彼は三日経っても私に全く触れようとしなかった。それはまさに**異常事態**だった。私はだんだん居心地の悪さを感じるようになった。医療的な介護をすることは嫌いではないが、私の仕事は彼らが死なないかぎりは決着がつかない。私は早くあれをすませて一人の時間をとり戻したいと思っていた。彼は十二月の真ん中に来て、クリスマスになっても家に帰ろうとしなかった。

「なんで家族とか恋人と過ごすさないのですが？」

ある日思い切って私は彼に聞いてみた。

「僕は家族といたくないんだ。恋人はいなし」

「なぜ両親といたくないの」

「いろいろあってね」といって、彼はそれまでの両親との確執を少しずつ教えくれた。彼は昔から絵の勉強をしたかったが、強制的に医者の勉強をさせられ、関係が悪化してしまったらしい。

「君は好きで看護師になったの」

彼は私の顔を眩しいものを見るようにして言った。

「看護師、私がですか？」

ぎくっとして私は答えに詰まってしまった。

「違うの」彼は不思議そうな顔をした。

「ええとまあそうですね。昔から看護師にあこがれていたんですよ。それよりどうしてこの施設を知ったのですか」

私は彼の質問をはぐらかした。答えたくないのだ。

「僕は王君に勧められてここに来たんだ。いい保養施設があるって聞いて」

「あなたはオーナーのお知り合いなのですか」驚きの連続だった。

「そう大学時代の友達でね。結構よく遊んだよ」

私はあまりの意外な事態に動転して、その後無口になってしまった。なぜ彼はオーナーから私の本当の役割を知らされていないのだろう。オーナーの意図が全くわからなかった。オーナーの友達であり、しかも私を抱く意図をもたないお客に、どう振る舞えばいいのか？　出来ることはただ看護師の助手をすることだけだった。私は彼の前になるべく表れたくはなかったが、仕事なのでしぶしぶ彼の部屋に毎日顔を出した。

彼が私をモデルに絵を描きたいと言ったのはそんなある日のことだった。私はようやく具体的な役割をもらって、ほっとした。私はさっそく彼の趣味である清潔でシンプルなデザインの白いワンピースを着て、窓を背景にして椅子に座り、彼のモデルを勤めるようになった。彼

は絵が完成すると早速私に見せてくれたが、それは平凡で更にいえばつまらない絵だった。絵の女の子からは私らしさが、あまり伝わってこなかった。

私はオーナーにその夜電話をかけた。

「あの人をなんのために、ここに誘ったのですか？」

「姫はただ彼の求めるものを与えればいい。彼は何か要求してこなかったかい？」

「絵のモデルをさせられています」

「そうか。あいつは絵が好きだからな」

「彼は私を抱いた人が全員心臓発作を起こしていることを知っているのですか」

「知らないよ。でもそんなこと知らせる必要はない。奴が姫を求めればそれは奴の運命だ。彼はどっちにしても長くないんだ。心臓の具合が良くないんだよ」悲しそうな声だった。私も悲しくなった。

オーナーはそうやって感情を抑制した口調で私の使命をゆっくりと思い出させてくれた。

翌日になっても彼は私には触れようとせず、モデルを朝から勤めさせられた。昼食を食べてまたデッサンを再開する時に

「今度は気分転換にヌードデッサンをしませんか」と、私は挑発的に言った。彼はびっくりして返事もしないで、

私を見つめていた。私は黙ってワンピースを脱ぎすて、下着を焦らすようにゆっくりと彼の目の前で脱いでいった。下着は白い清潔なものだった。彼は目を逸らした。

「君は看護見習でここにいるんじゃないの」と、彼はとまどいながら言った。

「違います。ここには男性のしかも、あなたのような金持ちの患者しか来ないんですよ。 特別の慰安を求めてくるんです。分かるでしょう？私が何者なのか」

私はガキにしては、乳房は大きく、それを今まで沢山の男が愛していった。腰は完全ではないがかなりくびれていて、あそこは薄い毛が生えている。でも私のあそこが、あの 世に繋がっていることは目の前の男は全く知らない。

その後で彼は黙って、私のヌードデッサンを始めた。静けさが室内に戻ってきた。１０分ほどして私は大失敗をした。小さい音だけど、おならをしてしまったのだ。やはり緊張していたのか、それともただお腹が冷えてしまったかわからないが。彼はくすっと笑った。私は恥ずかしさに逃げ出したくなって、真っ赤になってしまった。

「ごめんね。笑ってしまって。とても可愛い音だったから」
「すいません。変な音聞かせちゃって」
先ほどまでの勢いはなく、私はおどおどして言った。
彼は自分のベッドにいき毛布を持ってきて、私の身体を包み込むように被せた。
「風邪をひいちゃうよ。君は服を着たままでも、十分すぎるくらい魅力があるから服を着て」と、彼は優しく言った。私はなんだか心に少し羽が生えたような気分がした。その後　また服を元通りに着て、大人しくモデルを務めた。
晩秋の夜に暖炉の火が入れられて、私の白いワンピースにはオレンジ色の光が踊った。静けさのなかにパチパチと炎の爆ぜる音だけが部屋に響き渡る。暗闇のなかで絵筆を走らせる男の真剣な顔はなんだか良かった。
私の中に温かくてちょっとどきどきした気分が沸き上がるのを感じた。しかしそのあとで突然自分の汚れた身体が信じられないほど、うとましくて悲しくなってしまった。私はうつむいてしまった。
「どうしたの」と彼は私に聞いた。
「なんで抱いてくれないの。私が汚いから？　ガキだから？　」私は涙を隠さずに言った。

「僕がいま抱いたら、君にとってはただの客でしかないだろう。そんなのつまないよ。とりあえず僕は最高のモデルに出会ったんだ。それだけで満足だよ」

彼はハンサムではないが、暖かい人柄そのままの笑顔をもっていた。私の嫌いな金持ち特有の余裕が、彼の場合は私を心地良くしているみたいだ。

私はその翌日からも、彼の希望通りモデルを務め続けた。彼と無理やり“あれ”をしようという気分は失せていた。完成した絵は昨日より確実に良くなっていた。それまで人形のように見えた人物画に今までにない生き生きした躍動感が備わってきていた。私はとてもうれしかった。結局彼は私に触れることなく、絵を描きつづけて、二週間ほどして自宅に帰っていった。手紙をその後何枚もくれた。私も彼のことを忘れなかった。